

アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり

田倉川と暮らしの会 代表 伊藤喜右エ門

はじめに

南越前町今庄は福井県のほぼ中央に位置し、岐阜県と滋賀県に接した人口約5,000人、全面積の92%を森林で占める山間の小さな町である。(図-1)



図-1 アカタン位置図

明治28,29年に2年続きで襲った豪雨により、今庄町古木のアカタン(赤谷)では、奥山大平にて地すべりが発生し、土石流の災害をもたらし住民を震撼させた。

それから約100年後、平成10年7月「田倉川と暮らしの会」を設立、アカタン土石流災害の復旧と防災に取り組んできた先人達の砂防施設遺産を再認識する活動を開始した。住民と都市住民はこの歴史的遺産を現地保全しながら、アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり活動へと展開している。また、歴史的砂防遺産を生活防災遺産としてとらえ、自分の集落は自分達で守っていこうという防災意識の啓発にも取り組んでいる。

アカタンの砂防施設遺産

福井県嶺北地域の南端に位置する南越前町今庄は、日野川の上流部を占める山間部に広がってい

る。日野川を包む東方、南方には1,200m級の越美山地が岐阜県、滋賀県との県境をなしており、西方は700m級の本ノ芽山地が日本海まで続いている。この本ノ芽山地は、福井県にとっては嶺北と嶺南の境界をなしているが、古代、中世を通じて北陸へ通じる街道は本ノ芽が発祥であり、北陸地方にとっても歴史的に重要な意味をもつ山地である。これら三方の山地から大小20の河川が日野川に注ぎ込んでおり、現在の集落が形成された谷底平野に展開している。いずれも谷幅は狭く、急勾配の河川が多く存在する。数多くの旧河道が過去に水害が多発したことを物語っており、明治以前の水害記録も残っている。濁流に田畑が流され石高が減少し、米の供出ができなくなることもしばしばあったという。

30度以上の急斜面が流域面積の45%を占める険しい山地からなるアカタンでも、同様な被害を被っている。中でも、明治28,29年の度重なる豪雨によって発生した大規模な土砂災害では、大平の地滑りによって流出した多量の土砂が、溪間の田畑を埋め尽くし、田倉川との合流点にまで及んだと記録されている。

この大きな災害を受けて、明治33年より福井県の第一期砂防事業として、各種砂防工事が実施された。伝承では1日200~300人がこの工事に就業し、婦女子は千本付きによる土堰堤の築堤を、男性は石積みの作業を行ったと伝えられている。

100年を経た現在も、2基の土堰堤と7基の石積堰堤、石積堰堤と護床工が階段状に連なる堰堤群が現存しており、その多くは他に類を見ない独特な特徴を有している。水通しは山脚部に設けられており、それに沿って築かれた導水堤によって、通常の流水は堤体を越流しない構造となっている。また、石積みは岐阜県から専門石工を呼び寄せたと云われており、「亀甲積み」と呼ばれる工法で、

アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり

田倉川と暮らしの会 代表 伊藤喜右ヱ門

一つの石を中心に、周囲を6個の石で取り囲むように積まれている。さらに、水叩き部に巨礫を敷き詰めることにより、下流洗掘に対処していることや、堤内部に小礫を主体とした透水性の材料を用いて、水圧を低減する構造となっているなど、先人の優れた知識や技術が集結した、砂防施設遺産であると言える。アカタン砂防施設は、今もなお自然環境に調和した独特の美しい景観を見せながら、その役割を果たし続けている。



景観のいいアカタン砂防 戸の東堰堤

得意技を登録した住民と都市住民の交流連携

先人たちの暮らしと流域の魅力や資源を発掘しようと誕生した田倉川流域の住民は、得意技を持って参加した都市住民と良い関係で交流連携している。得意技は、自己紹介の道具のようなもので、会員交流に効果をもたらしてくれる。たとえば、地域住民である会長のキヨモンさん(住民はほとんど屋号で呼び合っている)は民俗踊りの踊り手名人、ゴンパさんは語り部であり音頭とり名人である。一方の近隣都市住民は、写真・登山・動物・釣り・河川・砂防・土木・森林・地質・農村整備・ダム・歴史・民俗・自動車修理・新聞記者・ラジ

オ放送プロデューサーなど様々な得意技をもっている。得意技の登録は住民が専門的な知識をとり入れることに役立っている。専門家の勤務先は、大学等の研究者や教員、国や地方行政および民間企業に勤務する技術者が多い。

独創的な活動プログラム

「田倉川と暮らしの会」が誕生した草創期は、古老からの記憶の収集を進める一方、専門家グループと現地調査を徹底して行ってきた。それらの活動報告や調査の成果などは、「気まぐれ通信・田倉川と暮らしの会」の発行や、リトリートくら展示交流ホールを借りての、会の活動内容展示によって、地元住民や訪問者に公開した。また、現地から20kmほど離れた武生市の民間会社事務所内にオープンハウスを設け、活動案内や展示パネルを並べることで、都市住民への情報発信基地として利用するとともに、活動について気軽に話し合える空間として活用されている。



コア施設展示交流ホールで子どもたちに活動を説明する住民

イベント企画の際は、「残雪恋しタイム&リバーアドベンチャー」「先人達はどのような情念で・感性で造りあげたか」「炉端シシ鍋座談会」など、好

奇心を誘うテーマやプログラムになるよう知恵を出し合った。



都市住民とフィールド・ミュージアムづくりの意見を出し合う。



毎年6月に開催している土砂災害防止月間行事

また、「アカタン砂防100周年記念穂高砂防実習バスツアー」として、神通川砂防施設見学、中尾温泉炉端ミニフォーラム、奥飛騨砂防博物館見学および立山カルデラ砂防博物館にて「砂防ミュージアムづくり意見交換会と交流会」を開くなど、県外の関連機関との交流も行ってきた。

学習活動も行っている。「伝統的砂防技術と近代

技術の融合」をキーワードにしたフォーラムの開催や、高専学生、工業高校生徒の砂防測量実習、全国の大学生参加のキャンプ砂防を受け入れている。最近では小学生のキャンプ体験のプログラムに「アカタン砂防見学と語り部の交流」が行われるようになってきた。

これらの活動がきっかけとなり、平成13年5月には河川環境管理財団の助成を受けて、冊子「アカタンまるごとミュージアム活動の記録Vol.1」を発行した。その内容は全国大会や各種学会などにも発表してきた。



住民は自主的に施設の保全整備に取り組む

平成13年からは6月の全国土砂災害防止月間に合わせて啓発活動も行っている。先人達の砂防施設遺産を、「自分の集落は自分達で守ろう」という生活遺産として捉えた活動である。平成15年の土砂災害防止月間には、「アカタン砂防フィールド・ミュージアム実験オープン」として、はじめて管理行政との協働による「アカタンまるごとミュージアムー住民の暮らしと砂防展ー」を開催した。このイベントでは、「アカタン砂防の歴史や暮らしなど一挙展示」と銘打って、「アカタン砂防の歴史」や「土砂災害について」を紹介するパネル展示や、

アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり

田倉川と暮らしの会 代表 伊藤喜右エ門

ビデオ上映を行うとともに、「暮らしの民藝展」として、120年前の古木集落の土蔵から見つかった民具等を展示した。また野外でのイベントとしては、「アカタン砂防・トーク&ウォーク」として、「田倉川と暮らしの会」の語り部と共に散策しながらの砂防見学会を行った。

そのこともあって、同年に「土砂災害に備え住民避難訓練」が古木集落をモデルに開催された。

フィールド・ミュージアムづくり

フィールド・ミュージアムが誕生した背景としては、住民自らが地域の有形無形の資産や遺産を発見したことで住民としての存在感や誇りを持ってきたこと、また専門家の支援が住民の知識を高めてきたこと、地域住民と近隣都市住民の交流によって、都市の文化的情報を地域特性や地域の民間

風俗と融合させ、新たな独自性を画きだしたことが挙げられる。

先人達の遺したアカタン砂防施設は、土砂災害防止、環境の保全に大いに貢献し役立っている。住民はミュージアムをつくり、先人達の自然環境との付き合い方を学び、本来の知識を取り戻しながら暮らしていきたいと考えている。またこの領域には多くの施設があり、これをまるごと有効に活用することで地域の振興に役立つことと考えた。

さらに平成15年より、行政と協働でアカタン砂防堰堤を登録有形文化財に登録申請するための作業をはじめ、平成16年6月に登録された。

フィールド・ミュージアムの全体像は、図-2に示す領域である。

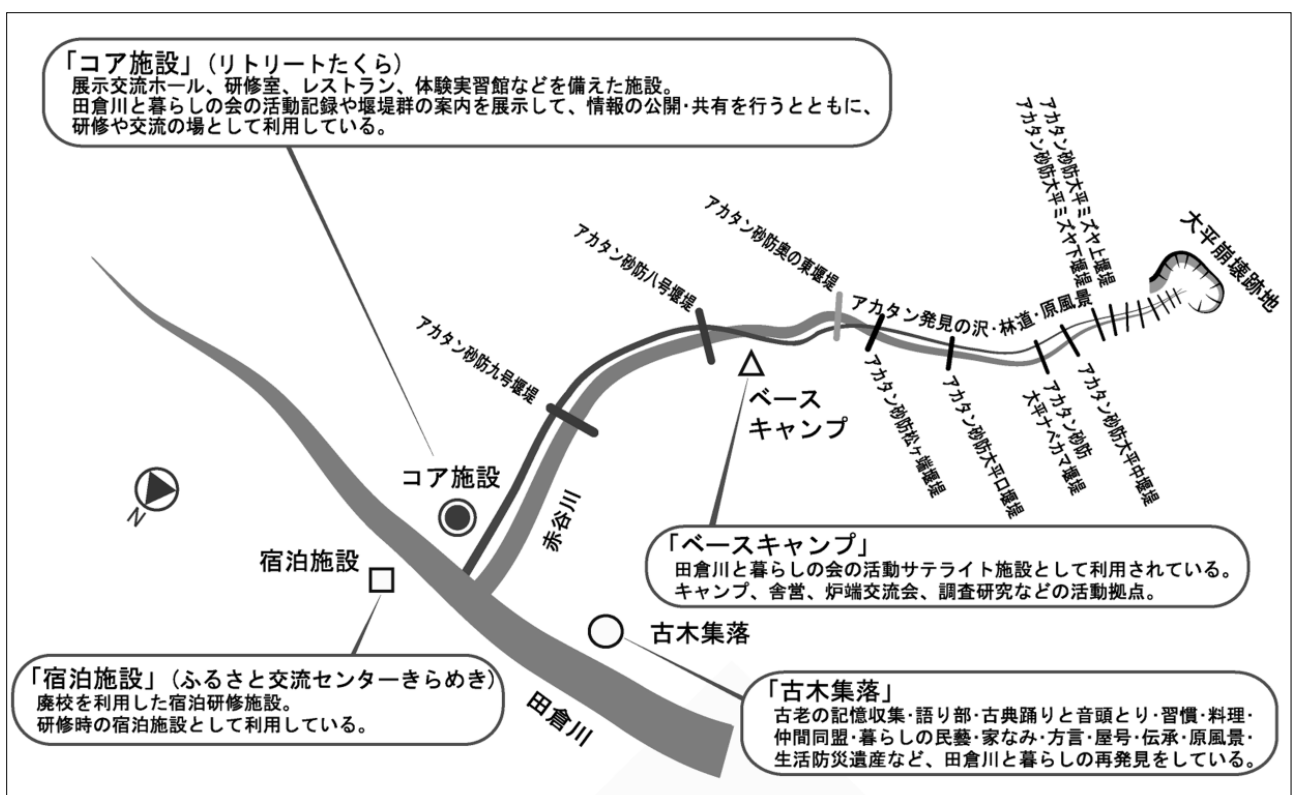


図-2 フィールド・ミュージアム領域図

常設フィールドとしての川に学ぶ川人活動

平成16年度からはフィールドの資源を有効に活用した「川に学ぶ体験活動」の実践を始めた。

子どもたちを対象にした「アカタン川人クラブ」を河川管理者と教育委員会の構成で協議会をつくり「子どもの水辺」に登録した。子どもや家族を対象に故老の川人達人と交流しながら伝統的魚捕りや、暮らしの体験キャンプなど開催した。



川に学ぶ体験活動で活躍する地元住民

また、川に学ぶ指導者育成講座福井県第1期を開催し、東京、三重、大阪からも参加し30名の初級指導者を育成した。さらに「川に学ぶ体験活動全国大会in日野川流域」のメイン会場を誘致し全国の川に学ぶ活動団体を「川人」と呼んで田倉川流域住民が自然体でもてなした。今年度はさらに川に学ぶ資源の発掘と、フィールド整備、プログラムの充実に努めた活動を計画している。



川の指導者養成講習会の常設会場を目指す。



伝統的砂防技術と近代技術の融合を議論する川人たち

まとめ

これまでの活動の経緯を整理すると、①古老から記憶を収集した。②住民が調査をはじめた。③武生市内にオープンハウスを設けた。④都市住民と学際的専門家を巻き込んだ。⑤早々とフィールド・ミュージアムの実体像をつくり上げた。⑥住民の暮らしと融合した学術的イベントを次々に開催した。⑦活動報告や研究成果を次々に全国に発表公開した。⑧生活遺産として土砂災害防止の学習拠点を狙った。⑨行政に情報を提供した。⑩行

アカタン砂防フィールド・ミュージアムづくり

田倉川と暮らしの会 代表 伊藤喜右ヱ門

政と協働でアカタン砂防フィールド・ミュージアムを実験オープンした。⑪行政と協働で登録有形文化財の登録申請を行った。⑫川に学ぶ常設フィールドとして川人体験活動、指導者の養成、学習・研究活動を推進する。行政の意思決定情報と住民や専門家の情報交換によってお互いがよき協力者としていい関係を持続し、貴重な文化財を保

全し、住民の川と暮らしの民間風俗資源を活用しながら川に学ぶ体験活動の拠点づくりを目指し活動している。

参考資料

日本遺跡学会誌第1号2004 遺跡学研究；「明治の砂防堰堤群を活用したフィールド・ミュージアムづくりー福井県今庄町における事例ー」田中保土ら4名